

氏名（本籍）	出野 由紀子（埼玉県）
学位の種類	博士（英米文化）
学位記番号	博乙第12号
学位授与年月日	令和6年3月15日
学位授与の条件	学位規則第4条第2項該当 言語文化研究科 英米文学専攻
論文題目	ヘンリー・ジェイムズの作品における金銭観 Views of Money in the Works of Henry James
論文審査委員	主査 教授 竝木 崇康 副査 教授 山田 千香子 副査 准教授 佐々木 優 副査 大島 一芳（外部審査委員）

論文内容の要旨

本論文では作品に記述される文章からジェイムズの経済状況への考察を深めて、国際人として身につけた新大陸アメリカと伝統的ヨーロッパの経済観をジェイムズの登場人物の描写から分析した。ジェイムズは、自分の生活がアメリカ、ヨーロッパのどちらに置かれようとも、常にどちらにも「同化」しなかったように思われる。だからこそそれぞれの大陸の外からそれぞれを客観的に観察し、移りゆく時代の社会の経済的背景を緻密にそして丹念に考察することができたのであろう。『ある貴婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady*) (1881)のイザベル・アーチャー、『鳩の翼』(*The Wings of the Dove*) (1903)のケイト・クロイは自分の思いのままに自分の力によって自分の道を切り開いていく女性の代表でありながらも、金銭によって人生を翻弄されてしまい、人間関係によって深く悩み傷つく。この2作品の2人の女性の行動分析を研究の基礎に置き、国家間の移動を繰り返した者だからこそ表現できる社会情勢、つまり両大陸の経済状況が作中の人々にどのような影響を与えるかを、ジェイムズの両大陸移動歴から考察した。

本論文の構成は以下の通りである。まず第1章において、アメリカとヨーロッパがジェイムズの感性に与えた影響を家族との関係から分析した。つまり、ジェイムズの祖父にあたるウィリアム・ジェイムズ、父であるヘンリー・ジェイムズ・シニア、兄であるウィリアム・

ジェイムズ、これら3人がジェイムズ(ヘンリー・ジェイムズ)に及ぼした影響を考察することによって、家庭環境がジェイムズに与えた経済観を明らかにした。

次に第2章において、ジェイムズ作品における似非科学の経済効果を分析した。19世紀末から20世紀初頭にかけて、産業化とともに人間疎外も進行する中で、他の科学でも、現実から逃避するかのように幻想的でありスピリチュアル的である世界を追い求める手法が急速に人々の心に浸透していった。生計のほとんどを原稿料に依存していたジェイムズが、当時流行りであった題材をもとに幽霊小説の経済効果に大きな関心を持ったとしても不思議ではないであろう。そのような作品(『聖なる泉』*The Sacred Fount* (1901)、『密林の獣』*The Beast in the Jungle* (1903)、『愉快的街角』*The Jolly Corner* (1909)など)の分析から、ジェイムズがどのような経済観を身につけていたかを明らかにした。

第3章では、国際テーマ小説における「破壊をもたらす金銭」描写を「四度の出会い」“*Four Meetings*” (1877)や『デイジー・ミラー』*Daisy Miller*(1878)などを中心に考察した。これらの作品の中にはジェイムズの国際テーマ小説の原型がきわめて顕著にあらわれている。素朴であるがゆえにヨーロッパに対して途方もない幻想を抱いているニューイングランドの女性の挫折の話や、無垢な良心が旧世界ヨーロッパの不毛な物欲の犠牲となる話である。初期の国際テーマ小説に登場するヨーロッパが持つ古き良き伝統に恋焦がれるアメリカ人を分析し、それと共にそのような小説を書くことで得られる経済効果を分析した。

第4章ではフランスからイギリスへ移動するジェイムズの金銭描写の変化をフロベールの『ボバリー夫人』(*Madame de Bobary*)のエンマ、『ある貴婦人の肖像』のイザベル、『黄金の盃』(*The Golden Bowl*)のマギー3人の女性の状況から分析した。「破壊をもたらす金銭」から「自由を手に入れる金銭」へ、そしてそこから更に発展し、「人間関係を修復するための対価としての金銭」へと移りゆく過程が明確になった。

第5章では、ジェイムズの「ペイスト」“*Paste*” (1899)とモーパッサンの「首飾り」“*La Parure*” (1884)、「宝石」“*Les bijoux*” (1883)を比較検討することによって、「本物」と「偽物」からわかる金銭の役割、「宝石」が象徴する意味について、他のジェイムズ小説と比較しながら分析した。その分析によってジェイムズの中期短編小説における「自由を手に入れる金銭」の描写からジェイムズの経済観が理解できるだろう。

第6章では、初期に書かれたジェイムズの国際テーマ小説と後期に書かれた国際テーマ小説を比較検討し「金銭モチーフ」の観点から分析した。主に『鳩の翼』を扱い、ジェイムズ作品を理解する上で「芸術的統一の達成」や「感情の顫動が最も深く聞こえるような小説」という観点からではなく、アメリカ、イギリス、フランス、イタリアに移り住んだ作家の鋭い観察力と登場人物の意識の揺れが、「破壊をもたらす金銭」、「自由を手に入れる金銭」から影響を受けていることがわかるであろう。ジェイムズの国家間の移動と当時の社会情勢の分析を通して、新批評、ジェンダー論、またはそれ以前の批評では考察されて来なかったジェイムズ作品の新たな解釈が可能になった。

博士論文審査の要旨

I. 論文審査の要旨

出野由紀子氏による博士論文「ヘンリー・ジェームズの作品における金銭観」（令和6年1月22日提出）について、令和6年2月2日に公開試問及び最終試験が行われた。その論文審査について報告する。

本研究は、ヘンリー・ジェームズの諸作品を「金銭のモチーフ」という観点から分析した研究である。アメリカとヨーロッパの間を移り住んだジェームズは、新大陸アメリカと伝統的なヨーロッパの両方の金銭観を身につけていた。本研究では、ジェームズの作品とその登場人物について「金銭のモチーフ」から分析することにより、ヘンリー・ジェームズ作品が持つ文学的意義を新たな観点から論述している。

第1章においては、アメリカとヨーロッパがジェームズの感性に与えた影響を家族との関係から分析した。祖父・父・兄の3人がヘンリー・ジェームズに及ぼした影響を考察することによって、家庭環境がジェームズに与えた金銭観を明らかにした。

第2章においては、ジェームズ作品における似非科学の金銭効果を分析した。ジェームズは「幽霊」や「吸血鬼」という題材を作中に入れることによって、人間関係の曖昧さを表現していた。

第3章では、国際テーマ小説における「破壊をもたらす金銭」について考察した。『ある貴婦人の象徴』以降の国際テーマ小説においては、「金銭」は次第に自由の象徴へと形を変えていく。「金銭」は個人の自由の条件、人間の潜在能力を可能にするものの象徴でもあった。

第4章では、フランスからイギリスへ移動するジェームズの金銭描写の変化をフロベールの『ボバリー夫人』(Madame deBobary) のエンマ、『ある貴婦人の肖像』のイザベル、『黄金の盃』(The Golden Bowl) のマギー3人の女性の状況から分析した。「破壊をもたらす金銭」から「自由を手に入れる金銭」へ、そしてそこから更に発展し、「人間関係を修復するための対価としての金銭」へと移りゆく過程を明らかにした。

第5章では、ジェームズの「ペイスト」“Paste” (1899) と モーパッサンの「首飾り」“LaParure” (1884)、「宝石」“Les bijoux” (1883)を比較検討することによって、「本物」と「偽物」からわかる「金銭」の役割、「宝石」が象徴する意味について、他のジェームズ作品と比較しながら分析を行った。富を与えるという建前を持ちつつ、実のところ「金銭」は相手の心に訴えかけ、深淵な思考をさせる手助けをしていた。即ち、間接的に他者を支配する役割をしていたのであった。

本論文の中心となる第6、7、8章では、初期に書かれたジェームズの国際テーマ小説と後期に書かれた国際テーマ小説を比較検討し「金銭のモチーフ」の観点から分析した。初期に書かれたジェームズの国際テーマ小説と後期に書かれた国際テーマ小説を比較検討し「金銭のモチーフ」の観点から考察し直すと、「破壊をもたらす金銭」、「自由を手

に入れる金銭」、そしてそこから更に発展し「人間関係を修復するための対価としての金銭」という観点から作品を分析することができた。「金銭のモチーフ」という着眼点を加えることによって、即ち道德規範と金銭観を同時に扱うことによって、深淵であると同時に社会情勢を踏まえた作品としてアメリカとヨーロッパのどちらにも受け入れられる小説を、ヘンリー・ジェイムズは作り上げたのであった。

本研究の成果として、ヘンリー・ジェイムズの作品を「金銭のモチーフ」の観点から考察し、結果として金銭を「破壊をもたらす金銭」「自由を手に入れる金銭」、そして「人間関係を修復するための対価としての金銭」という3つの段階に分析したことがあげられる。この成果により、ヘンリー・ジェイムズの作品について文学的な意義を再評価することが可能となったのである。

以上の点を評価し、当審査委員会は全員一致で、本論文が申請者に対して博士（英米文化）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。

II. 試問の結果の要旨

出野由紀子氏による博士論文「ヘンリー・ジェイムズの作品における金銭観」について、公開試問及び最終試験を実施した。その審査結果について報告する。

公開試問は、令和6年2月2日（金）13時00分から14時00分まで、8号館6階ゼミ3・4において実施した。試問は、論文申請者による発表20分と審査委員及び傍聴者からの質問40分という形で進行された。その後、審査委員は、出野氏に対する最終試験を同教室において、14時00分から14時30分まで実施した。

公開試問では、博士論文の新規性、ヘンリー・ジェイムズに対して家族が与えた影響、第2章執筆の意図、ヘンリー・ジェイムズ研究において最も貢献した点等の質問があった。いずれの質問に対しても適切に応答がなされた。最終試験では、審査委員よりヘンリー・ジェイムズ作品を3つの段階に分けた点を評価する声があったが、一方でこの論点をすべての章でより明確に論述すべきとの指摘もあった。しかしながら、本論文が今後のヘンリー・ジェイムズ研究に寄与する点や、今後の展開について論文申請者が理解している点も確認できた。

上記の公開試問及び最終試験を受けて、審査委員会を開催し、博士論文の可否を審議した。その結果、審査委員会は本論文が学位論文として価値あるものと判断し、全員一致で合格と判定した。